

ダニエル書「七十週の預言」における七週の謎：シャローム回復の視点から

ダニエル書9章24節から27節にかけて記された「七十週の預言」は、聖書の中でも特に解釈が多様で、多くの議論を生んできました。中でも、預言の開始点となる「七週」の解釈は、全体の理解を左右する重要な鍵となります。

「エルサレムを復興し、再建せよとの命令が出てから、油注がれた者、君主が来るまでが七週。また六十二週あって、苦しみの時代に、広場と堀が再建される。」（ダニエル書 9:25 新改訳）

伝統的な解釈の多くは、「七週」と「六十二週」を未来のメシア（キリスト）の到来を指し示す年代表と捉え、その後の「油注がれた者の断絶」を一人の人物の死と解釈してきました。しかし、ご提示いただいた視点に基づき、ここでは「七週」を**共同体のシャローム（平和、完全、繁栄、健全さ）が回復・完成する期間**として、そして預言の結末を**祭司職（油注ぎ）そのものの歴史的終焉**として読み解く「シャローム解釈」を深めていきます。

1. 「来るまで」ではなく「期間」としての七週

まず、「油注がれた者、君主が来るまでが7週」という句の解釈が重要です。ご指摘の通り、ヘブライ語原文では「来る」（*בוא*, ボー）という動詞は、必ずしも「特定の時点に到来する」という意味に限定されません。文脈によっては、ある状態の「出現」や「存在」を示すことも可能です。

このことから、「七週」は、ある一点の出来事を指すのではなく、「**油注がれた者、君主**」が存在し、その働きによってエルサレムが回復していく「**期間**」そのものを指していると解釈できます。つまり、「布告から、油注がれた指導者たちの時代を経て、町の回復が軌道に乗るまでが七週（49年間）」と捉えるのです。

この視点に立つと、「油注がれた者」は単一の人物ではなく、捕囚帰還後の共同体を指導した複数の指導者たち、すなわち**総督ゼルバベルと大祭司ヨシュア**に始まる一連の指導者層全体を指すと考えられます。彼らは文字通り油を注がれて聖別された職務に就き、神殿と共同体の再建を導きました。

2. ネヘミヤ記に見る「シャローム」の具体的な回復

ダニエル書の預言する「エルサレムの再建」が、単なる城壁や建物の物理的な修復だけを意味しないことは、ネヘミヤ記の記述から明らかです。ネヘミヤとエズラの指導のもとで行われた改革は、まさに「シャローム」の回復そのものでした。

- **律法の再発見と仮庵の祭り（ネヘミヤ8章）**：民は律法を聞き、悔い改め、レビ記に記された通りに仮庵の祭りを祝いました。これは、神との契約関係の回復という霊的な再建の核心です。
- **契約の更新（ネヘミヤ9-10章）**：民は自分たちの罪を告白し、神との契約を更新する誓いを立てました。安息日、安息年、ささげ物など、共同体の生活全体を神の律法に沿って再編成することを誓約しました。
- **共同体の聖別と城壁奉獻（ネヘミヤ11-12章）**：エルサレムに住む人々がくじで選ばれ、都が聖別されました。そして、感謝と賛美の歌声が響き渡る中で城壁の奉獻式が行われました。これは、物理的な城壁が、神を礼拝する聖なる共同体を守るためのものであることを象徴しています。ネヘミヤ記12章47節が記すように、祭司やレビ人の務めが確立され、礼拝が正しく行われる体制が整えられたのです。

これらの出来事は、「エルサレムを復興し再建せよ」という言葉から始まる約49年間（七週）の間に起こったと考えられます。この期間は、まさに**罪からの聖絶、神との関係回復、社会的な秩序の再建、そして神への賛美があふれる「シャローム」が実現した期間**でした。

3. 油注がれた者の「断絶」と祭司職の終焉

「七週」と「六十二週」の後に起こることとして、預言は「油注がれた者が断たれる」（9:26）と述べます。この「断絶」を個人の死ではなく、**油注ぎの制度、すなわち祭司職そのものの機能不全と終焉**と捉えることで、シャローム解釈はより一貫性を持ちます。

過去主義の立場から、七十週の終わりをAD70年のエルサレム神殿崩壊と見なす場合、この解釈は驚くほど歴史的事実と符合します。

- **歴史的背景:** AD60年代、ローマに対するユダヤ戦争が激化する中で、エルサレムの祭司職は深刻な腐敗と内紛に陥り、その権威と神聖さは失墜しました。神殿での正規の礼拝やささげ物は混乱し、事実上機能不全に陥ります。これは「いけにえとささげ物をやめさせる」（9:27）という預言の成就と見ることができます。
- **「断絶」の成就:** そしてAD70年、ローマ軍による神殿の完全破壊により、アロンの系統に連なる祭司職とその務めは、物理的にも制度的にも**完全に「断絶」**されました。神殿がなければ、油注がれた祭司はその職務を果たしようがありません。こうして、「油注がれた者」という存在そのものが、イスラエルの歴史から姿を消したのです。

この視点は、七十人訳（ギリシャ語訳聖書）が単に個人を指す「油注がれた者（キリストス）」ではなく、「油注ぎ（クリスマ）」という行為・職務そのものがなくなると訳していることから強く示唆されます。さらに注目すべきは、それに続く言葉です。ヘブライ語本文が「そして、彼には何もない」と訳されるのに対し、七十人訳は「**そして、それには裁きがない (καὶ κρίμα οὐκ ἔστιν ἐν αὐτῷ)**」と訳しています。

この「裁きがない」という表現は、「油注ぎ（祭司職）の断絶」という解釈を決定的に補強します。神殿祭司の重要な機能の一つは、律法に基づいて共同体内の問題を裁き、罪の贖いのための儀式を執り行うことでした。その祭司職そのものが「なくなり」、その結果として、その**裁きの機能も権威も完全に停止する**と預言されているのです。これは、AD70年以降、神殿と祭司制度が失われたことで、その宗教的・司法的システムが終焉した歴史的事実を的確に描写しています。

結論：シャロームの回復から、新しい創造の完成へ

ダニエル書9章の「七週」は、単なる歴史の年表ではありません。それは、バビロン捕囚によって破壊された神の民の**シャロームが一度回復し、そして究極的な完成へと至る**壮大な救済史の物語を描いていると解釈できます。

「エルサレムを復興し再建せよ」という神の命令は、物理的な都の回復に留まらず、神を礼拝する共同体、すなわち「生きた都」の再建を意味していました。「七週」の間に、ゼルバベルやヨシュアといった「油注がれた者たち」に導かれて、このシャロームは一度回復します。しかし、預言の真の頂点は、七十週の終わりに訪れます。

回復された礼拝の中心であった祭司職（油注ぎ）とその司法的機能（裁き）が「断絶」されることは、単なる歴史の終わりではありません。むしろそれは、**新しい創造が完成するための転換点**です。この古いシステムが終わることによって、ダニエルに示された預言の究極的な目的、すなわち「**とがを終らせ、罪に終りを告げ、不義をあがない、永遠の義をもたらし、幻と預言者を封じ、いと聖なる者に油を注ぐ**」（ダニエル 9:24）ことが成就するのです。

この解釈は、問いの中心を「いつメシアが来るか」や「なぜシャロームが失われたのか」から、「神がどのようにして、地上の神殿や祭司職を超える、永遠の義と完全な贖いを完成されたのか」という、より深遠な神学的問いへと導きます。七十週の預言は、地上のシステムの終わりが、天における新しい創造の始まりであることを示しているのです。